

「私は元気です。」

南岡山医療センター
作業療法士長
小林 理英

今年から編集委員として編集会議に参加させていただいています。

編集余滴の原稿を依頼され、何を書こうかと思案しましたが、臨床場面での出来事を綴ってみようと思います。

作業療法士は生活を支援することを業としています。そのため、患者の思いを聞く力、気持ちを汲み取る力が求められる職種です。

まず、表題にした「私は元気です。」を書いた（入力した）女性は、長期療養中で終日ベッド上で過ごしています。挺舌（ていぜつ：舌を前に突き出す動き）でスイッチを操作しテレビを見ることができですが、自分の手で食べること、体の位置を変えること、自分の身体を触ること、声を出すことも出来ません。呼吸は呼吸器をつけています。その彼女と「伝の心、という意思伝達装置を使う練習をしています。彼女は手紙を書くことが好きです。その手紙で彼女は相手への気遣いの言葉の後に、「私は元気です。」と入力します。

彼女は日々の生活を退屈と感じています。また、今の生活に楽しみを見つけようとする貪欲さをもっています。

私は彼女のたくましさ、やさしさをリスペクトしています。私たちにとってあたりまえの生活のほとんどを体験することのない毎日の中で、人への思いやりや気づかい、自分への前向きさを持ち続けています。

先日は母の日に手紙を書いていた。「私を産んでくれてありがとう。」と書かれていました。

「毎日暇だなあ。」

別の男性も1日をベッド上で過ごしています。

「ありがとう。いつも迷惑かけてすみません。」と書いています。

その思いを奥様に伝えると、その思いに涙を流されていました。介護に大変な毎日で、「そういう思いを持っていたのですね。」と話されていました。普段は透明文字盤でしてほしいことを伝えるコミュニケーションは可能ですが、「ありがとう。」を文字盤で伝えることはないのかもしれませんが。

「自分の服を買いに行きたい。」

自分で起き上がることや、座ること、話すことが徐々にできなくなっている女性があります。文字盤で伝えられた言葉です。女性ならあたりまえの思いです。自分の選んだ気に入った服を着たい。外出できることを楽しみにしていました。

「できるうちはしたい。」

徐々に衰えるからだに向き合おうとしている男性の言葉です。座ることや箸を使うこと、トイレに行くことがしづらくなっている状況に「妻に迷惑をかけている。できる間はできることをしたい。」と話しています。やりづらそうだな、こうしたほうがいいのかなあと思っても伝えることは控えています。彼の思いを尊重したいと思っています。

話し声の聞こえない病室でいろんな思いで時間を過ごしている、その思いに触れたとき感動を覚えます。

NHOは神経疾患に対する医療に取り組んでいます。現場は意思表示ができず、コミュニケーションの難しい患者さんに追われていることが多いです。

そのなかで、人としての関わりを学び、学ばされていることを実感しています。

職員は追われている時間を過ごし、患者さんはたくさんの方に時間を退屈さや暇を感じながら過ごしています。そのギャップは時に立ち止り、向き合い、声をかけ、耳を傾け、同じ時間の流れの中で時間を刻むことで埋まる気がしています。少しの時間からでも始めたいと思います。

そして、患者さんの語りに、共感できる毎日を大切にしていきたいと思っています。